

保育のちから



鳴門教育大学大学院教育実践教授

鳴門教育大学附属幼稚園園長

佐々木 晃

「園長先生、私が跳ぶの数えてね」口を真一文字に結んで4歳児が短縄を構えます。私は「1、2、3、4、5」と数えます。縄は5回目で脚にかかってしまいました。でも、彼女の表情からは「どう？やるでしょう私」という思いが読み取れます。「すごい。5回も跳べたね」と喜ぶ私に、4歳児は納得した顔でうなずきました。彼女はすぐに息を整え、次の挑戦に備えて身構えています。もし、昨日まで7回跳べていた子どもに対してなら「5回『も』」という同じ言葉はかけません。その子は「園長先生、私を甘く見ないでね！ぷん」と自分の実力が正当に認められていないと感じ、逆に怒られるからです。そこで、私は「1、2、3、4、5・・・、5回」と、カウントしたあと、少し余韻を残すように「5回」であったことを伝えるでしょう。いいところを見せようと気はやり、失敗してしまったであろう、この4歳児は、「もう1回。園長先生、もう一回いくよ」と、再挑戦を宣言するでしょう。「・・・6、7、8、9、10、11、12、13。すごい。13回も！」と興奮する私に、今度は彼女も満足して微笑むはずです。

「5回」なのか「5回も」なのか、たった一語で変わってくる言葉のニュアンスで子どもを的確に認めたり、やる気を促したりできる保育者の専門性の高さをうかがい知ることができるでしょう。もちろん、その背景には、前日までの子どもの姿から読み取る育ちや学び、その子の性格など、子ども理解の基本がしっかりとなされていることも見逃してはいけません。

保育の現場はこのようなスリリングな瞬間の連続

で構成されているのです。このように、目標や課題をもって縄跳びに挑戦する4歳児の姿からも、幼児教育が子どもの「生きる力」の基礎を培うものであることが分かります。この縄跳び遊びの中でも遊びへの関心や心情、跳ぼうとする意欲や挑戦する態度などが促されている様子もよく分かります。でも、それだけではありません。例えば、「5回」という言葉は「全部で5回跳べた」という、ものの集まりの大きさ（集合の要素の数）を表す集合数（計量数）を意味しています。「お友達が跳ぶの待っていてね。あなたは5番目ね」は、順番を表す順序数を表しています。ですから、私たち保育者は、「5（ご）」とだけ言って終わりにしません。生活の中のTPOに合わせて意図的に「5回」「5番」等の数詞をつけて子どもに伝えたり、時に「五つ（いつつ）」という表現に触れさせたりもします。とくに「算数教育」という意識もせず、普通に、しかも日常のおこなっているこれは、幼児期の子どもたちに数理的な見方や考え方を自然な形でしかもアクティブ・ラーニングさせながら身につけさせている優れた指導なのです。「算数」という特別な時間ではなくて、生活の中で、日常的に、根気強く繰り返して行われる保育こそ、幼児期の子どもたちにふさわしい良質の教育と言えるでしょう。一方、「保育」は、総合的で日常的で、自然な形であるがゆえに、優れた保育実践でも世間の人たちには分かりにくいということも否めません。今後はさらに、説明力や発信力を加えて保育のちからを高めていくことが求められています。幼稚園教育100年の英知をもとに、先生方とつながり、新時代の保育を創造していきたいです。